

2023年度 国語問題

2022年11月30日実施

解答は全て丁寧にわかりやすく書くこと。判読しづらい文字があった場合は全て不正解とする。

【問題一】 次の各問に答えなさい。解答は全て解答用紙の解答欄に記入すること。
(配点24点)

問一 次の四字熟語の□内に入る漢字として正しいものを選択肢の中から1つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を複数回使用してもよい。

- ① 明鏡止□ ② 一言□士 ③ 一□専心

a 酔 b 血 c 博 d 拍 e 居 f 志 g 意 h 異 i 水 j 粹

問二 次の慣用句の()内に入る語句として正しいものを選択肢の中から1つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を複数回使用してもよい。

- ① () の頭も信心から へありがたがる
② () の一毛 へほんの一部
③ 紺屋の () へ自分のことをおろそかにする

a 九牛 b 烏合 c 大草原 d 仏 e 白袴
f 不養生 g 衣装 h 鯛 i 石 j 鯨

問三 次の文章はいくつの単語からなるか。単語数を選択肢の中から1つ選び、記号で答えなさい。

・好きな読書が充分出来ないのは残念である

- a 1 1 b 1 2 c 1 3 d 1 4

問四 次の作品のうち夏目漱石の作品でないものはどれか。解答は選択肢の中から1つ選び、記号で答えなさい。

a 羅生門 b 草枕 c 三四郎 d 夢十夜

【問題二】 次の文章をよく読み、後の各問に答えなさい。解答は全て解答用紙の解答欄に記入すること。(配点、問一～問四20点、問五31点)

只管打坐(注1)の基本的な手引書である『普勸坐禅儀』をひもとくと、そこには坐禅の作法が細かに規定されている。「ただ坐れ」と言いながら、それをするためのあれやこれやの守るべきルールのようなことを提示するというのはどう見ても矛盾しているのではないか。一方で自由や自発性を強調しながら、他方で、厳密なスケジュールに従って生活することや細かな食事作法を守ることを課すといった例からもわかるように、禅の世界には、「結局、どうすりゃいいんだ!？」と人を困惑させる、そういうダブルバインド的なメッセージが満ちているのだ。

心理療法の世界では、親や教師が日常的にダブルバインド的なメッセージを発していると、それを受け取る子どもは自己肯定感を下げたり、メンタルに悪影響を与えたりすると言われている。公園で遊んでいてなかなか帰ろうとしない子供に、親が「もう勝手にしなさい!」と強い口調で吐き捨てるように言う光景をよく見かける。言葉の上では「勝手にしろ!自由に遊んでいい!」と言いながら、非言語レベルでは「もう遊んじやだめ。すぐ帰りなさい!」というメッセージを強烈に発しているのである。こういう矛盾した支持を受け取った子どもは、その矛盾を指摘できないままダブルバインド状況に陥り、最終的には親の意思に従うほかなくなり、ストレスを溜め込むことになると思われる。だから、そういうダブルバインド的なメッセージにならないような工夫が勧められるのだ。

へい、只管打坐の世界では、「造作することなく、ただ打坐せよ」というメッセージと「この作法通りに坐れ」というメッセージが同時に与えられ、しかもそれら相互に矛盾し合うような二つの要求を同時に満たすような坐禅を実現させるよう迫られているのである。禅の公案というのはこういうダブルバインド的状况を創造的に打破して新しい局面に打って出ることを稽古するための教育装置ではないかと私は愚考している。もし、それが当たっているとすれば、只管打坐それ自身が禅の公案そのものだと言えるだろう。へい、

只管打坐に、安易に技法や技術、作為、造作を持ち込むと、それがたちまち習禅の方向に変質してしまうから、細心の用心をしなければならぬ。もちろん、只管打坐に技術的な側面がないわけではない。結跏趺坐(注2)で脚を組み安定した姿勢を作り、全身に呼吸の波が微細に行き渡るような息をし、居眠りや考え事に陥らないように高い覚醒度を保って坐るには、それなりに高度な技術が要求される。しかし、そうした技術を習得しさえすればそれでそのまま只管打坐ができるわけではない。それは音楽の世界において、ピアノ演奏のテクニクを完璧にマスターした者が必ずしも優れた「ピアニスト」であることを意味しないのと同列である。へい、

「ただ〇〇するだけ」と強調しておきながら、他方で同時に「ただ〇〇をする」ための細かな作法があつて、それを守ることがやかましく言われているのは何も只管打坐の世界だけではない。お茶の世界でもそういう一見矛盾したダブルバインド的な言説が普通に見られるのである。茶人の心得・作法などを和歌に詠んだ利休百首の中に「茶の湯とはただ湯をわかし茶をたててのむばかりなる事と知るべし」という教えがある。その

一方で、部屋への入り方、歩き方、茶道具の扱い方、茶碗を置く位置、茶碗の運び方、お茶の飲み方などが事細かに決められていて、それらすべてをマスターし淀みなく正確に行うことができるようになるまでには長期にわたる稽古が必要とされている。同じ利休百首の中に「稽古とは一より習ひ十を知り十よりかへるものその一」という教えがある。「ただ湯をわかし茶をたててのむ」のが茶の湯のほうなのに、なぜそんな稽古が必要とされるのだろうか？ 茶道を学んだことがある人でこういう疑問を持った人は相対的ではないだろうか。〈III〉

若き道元禅師は「顕密二教（けんみつにきょう）ともに談ず。本来本法性（ほんらいほんほつしょう）、天然自性身（てんねんじしょうしん）と。若（も）しかくの如くならば、三世の諸仏、甚（な）によつてか更に発心（ほつしん）して菩提（ぼだい）を求むるや」という疑問を抱いたと言われている。顕教でも密教でも、人は生まれながらにしてすでに仏なのだと言われ、それならなぜ歴代の仏たちや祖師たちはさらに心を発（お）こして仏法を求め仏になろうと修行を重ねたのか、という問いだ。これは、今われわれが論じている「ただ」を強調しながら、同時に稽古の必要性が言われることと同型の問題としてつながっているように思われる。〈IV〉

只管打坐とへ、ロ、という二つの異なる世界で、こうした「ただ」と「細かな作法・儀則」の両立あるいは統合という共通の課題が存在し、それぞれの道の学人が稽古としてその課題に取り組みされるのは単なる偶然ではないだろう。

「ただ」も作法を無視したただの「ただ」ではないし、「作法」も「ただ」と無関係なただの「作法」ではないのだ。作法に裏打ちされての「ただ」であり、「ただ」が自らを象（かたど）りとして表現したものが「作法」であるというように、それぞれが他方を媒介として高次のものへと高められ、そこで両者が一つのものとして成立しているのである。だから、矛盾し合う「ただ」と「作法」はそのままでは敵対的な相互排除の関係にある他はないのだが、稽古を通して、それを相補的な相互扶助の関係へと高めていくことが学人に要求されていることになる。言い換えれば、矛盾を矛盾のまま、どちらか一方を安易に切り捨てることなく、高い次元へジャンプすることで乗り越え統合するというのが稽古の眼目であり、修行のポイントであるということだ。

（web）春秋「はるとあき」令和三年十二月十六日付

『坐禅の割り稽古試論』 藤田一照 による）

注1 只管打座

余念を交えず、ただひたすら座禅すること。仏教、特に禅宗の語。「只管」はひたすら、ただ一筋に一つのこと専念すること。「打坐」は座ること、座禅をすること。

注2 結跏趺坐（けっかふざ）

仏教の座法の一つ。左右の足の甲を反対の足のもの上に交差し、足の裏が上を向くように組む座法。特に禅宗では座禅の正しい姿勢としている。「跏」は足の裏。「趺」は足の甲。

問一 問題の文章中には例のような同音異義語あるいは同訓異字の漢字間違いが1箇所ある。その間違いを指摘し正しい漢字に直しなさい。

- | | | | | | | |
|----|------------|---|----|---|---|----|
| 例1 | 大臣の職を自認する。 | 誤 | 自認 | ↓ | 正 | 辞任 |
| 例2 | 有名人を排出する。 | 誤 | 排出 | ↓ | 正 | 輩出 |
| 例3 | 事務を取る。 | 誤 | 取る | ↓ | 正 | 執る |

問二 次の文章は問題文中の〈I〉〈W〉のうち、どこに入るか。最も適切な位置を1つ選び、〈I〉〈W〉の記号で答えなさい。

〈I〉ここではこうしたテクニク（訓練）とアート（稽古）の本質的な違いはどこにあるのかという探究すべき大事な問題があることを指摘するにとどめる。〈W〉

問三 本文中〈イ〉に入る語句として正しいものはどれか。次の選択肢の中から最も適切なものを1つ選び、記号で答えなさい。

- a それゆえ b ただし c もちろん d ところが

問四 本文中〈ロ〉に入る語句として正しいものはどれか。次の選択肢の中から最も適切なものを1つ選び、記号で答えなさい。

- a 茶道 b 心理療法 c 音楽 d 仏教

問五 問題文の要旨を110字以上、120字以下でまとめなさい。句読点も字数に含める。ただし、要旨の中に「稽古」「作法」「只管打座」の語句を必ず入れること。なお、使用する語句の順番は問わない。

※解答は解答欄の1マス目から書き始めること。

【問題三】 次の文章をよく読み、後の各問に答えなさい。解答は全て解答用紙の解答欄に記入すること。(配点25点)

植物たちに、魔法がかけられた。そんなふうに見えるが春という季節である。冬越し野菜のエンドウは、ついこの間まで身を縮めるようにしていた。それがぐんぐん伸び始め、白い花をつけた▼枯れ木にしか見えなかったアジサイにも、鮮やかな緑の芽が吹いている。日差し長さや暖かさに反応しているのだと頭では分かる。しかし心のどこかで不思議さが拭えないから、毎年の感動があるのだろう▼私たちの遠い祖先である縄文人は、植物にどのように向き合っていたか。人類学者竹倉史人(ふみと)さんが近刊『土偶を読む』で説明を試みている。女性をかたどったなどと言われる土偶だが、竹倉さんは全く新しい見方を示した。土偶が表すのは、へいゝの姿である▼ハート形の顔の土偶は、クルミを割った形を写し取ったのではない。頭のとがった丸顔の土偶は、クリに由来するのではない。出土する地域を分析すると、植物の生育地と重なっているという▼研究しつつ竹倉さんが心がけたのが、森を歩き、へろゝ人の気持ちに近づくことだ。冬に死んだようだったクルミの木が春に芽吹き、秋に豊かな果実をつける。この死とへいゝの物語が「奇跡」以外の何であろうか…何らかの善意ある存在“の介在を感じないことの方が難しいだろう”▼恵みをもたらす植物の精霊の姿を想像し、形にしたのが土偶である。心躍る新説が、へいゝとなる日は来るだろうか。縄文人たちの春を思いつつ、エンドウの実がつくのを待っている。

(令和四年三月十三日付朝日新聞、『天声人語』による)

問一 本文中の「イ」 「ニ」に入る最も適切な漢字を答えなさい。ただし、全て漢字2字で答えること。

問二 本文のタイトルとしてふさわしいものはどれか。次の選択肢の中から最も適切なものを1つ選び、記号で答えなさい。

- a 春という季節
- b 春の魔法
- c 土偶を読む
- d 縄文人たちの春